ふるさとの風景を再発見する

雑草と里山の科学教育研究センター・准教授・西尾　孝佳

１．事業の目的・意義

高齢化・過疎化が進む里山では耕作放棄や森林の荒廃が著しく，いわゆる「ふるさとの風景」が大きく変化した。本事業では，ふるさとの風景とは何か，それはどこに残るのか，何がふるさとの景色を悪くするのか，どうすれば本来の景色を取り戻せるのかについて地域住民と考察した。

２．事業内容

(1) 出前対面講座の実施

那須烏山市大木須地区内に広がる山地，農地，耕作放棄地，水路などを構成要素とした，ふるさとの風景や生態系について考える機会を地域住民に提供した。当初，山歩きを前提にした自然観察講座の開催を計画したが，住民の多くを占める高齢者が無理に参加しないように配慮して，こういった問題に関心が高い住民を個別に訪ね，住民の所有する土地に起きている問題について説明し，ふるさとの風景について意見交換する「出前対面講座」を実施した。

図1．現在ツル植物で覆われイノシシの掘り返しも顕著な耕作放棄畑。ふるさとの風景における負の構成要素のひとつ。所有者によれば最近まで飼料用トウモロコシの栽培が行われていた。この現状について科学的に解説すると，住民による風景のとらえ方は変わり，雑草管理への意識が高まったようである

また，地域全体の風景の変化を振り返るために，撮影年代の異なる空中写真をA0サイズに印刷したものを持参し，農地の変遷，道路・河川の改修，送電線の建設，森林の伐採など，住民の記憶にある風景の変化を記録した。

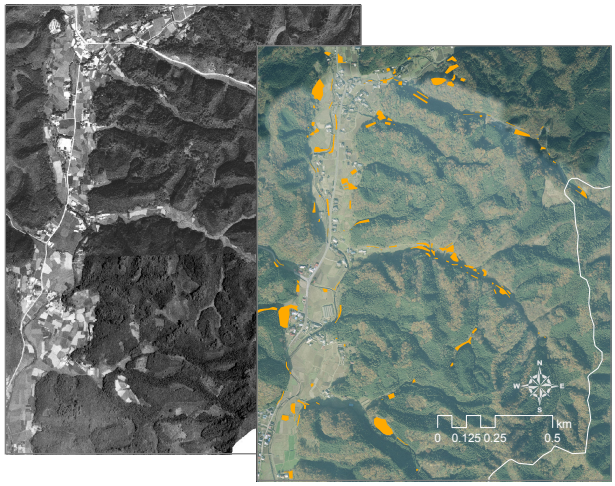

図2．撮影年代の異なる空中写真。白黒が1967年，カラーが2005年に撮影された写真。カラー写真にオレンジ色で示された領域は地域の景色を変貌させる原因の一つツル植物クズの分布を示す。こういった写真は，身近がゆえに，住民の強い関心を引いた

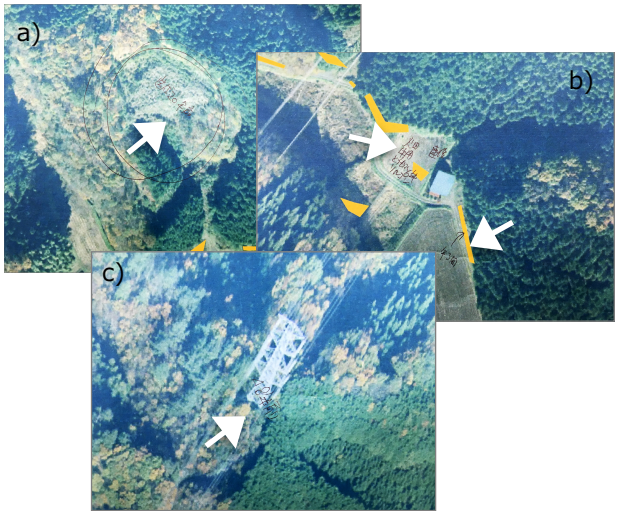

図3．空中写真へのメモ書きの例。住民から聞き取った情報は現場でA0サイズに印刷した空中写真に直接メモ書きした
a)牧場の造成年代; b)畑の作付け体系; c)送電鉄塔の設置年代

(2) ふるさとの風景について考えるワークショップの開催

「ふるさとの風景」のありかたについて，2017年2月9日に開催された，雑草と里山の科学教育研究センター主催の大木須フォーラムの中で，話題提供し，住民と意見交換した。話題提供では，入手した1949年以降の空中写真による土地利用や風景の変遷に関する解析に，住民の方々から伺った風景の変遷に関する情報を加えた研究結果を紹介した。意見交換では，大木須フォーラムに参加した学生も含め，住民が大木須地区のシンボルとして考えている簡易宿泊施設「ほたるの里古民家おおぎす」周辺の風景を中心に今後の課題を議論した。

図4．大木須フォーラムの様子。学生からの提案に聞き入る住民たち

３．事業の進捗状況

これまでに，高齢者がお住まいのお宅を中心に多数訪問し，ふるさとの風景の変化について対話した。また，可能な場合には，所有する土地を案内してもらいながら，風景の変化について相互に解説した。

４．事業の成果

当初企画した自然観察会という形は取れなかったが，風景の変化を知る手がかりとなる様々な年代に撮影された空中写真を持って，地域住民を訪問し，①それら情報と現場を解説すること，②住民からの情報を収集することを平行して行う手法は非常に効果的であった。住民による風景への意識が薄れ，里山の多くで風景が変質する中，このような手法を通じて，身近な風景への関心を高め，住民自ら風景を管理する目標を定める糸口が見出されることが期待される。

５．今後の展望

住民の多くが高齢者であることを考慮すると，現場での自然観察にこだわらず，今年度実施したような「出前対面講座」を柔軟に行えるような枠組み作りが重要かもしれない。その際，今年度使用した空中写真は非常に効果的であると考えられるが，必ずしも全ての住民が読み取れたわけではない。今後は，空中写真とともに，申請者や学生が現場を踏査して撮影した写真や動画を活用した講座を企画すれば，ふるさとの風景を体感したり，昔を思い出したり，将来を想像したりすることがもっと簡単になるかもしれない。今後はそういった仕掛け作りを事業に取り込んでいきたい。

また，今年度の事業で対象とした場所は大木須地区の一部で，現在も昔の風景が残っている場所があるか，特に大事にしたい風景は何か，などについては，十分な情報が得られなかった。上記のような手法で，より多くの住民に参加を促し，ふるさとの原風景について地域住民と情報を共有したい。